

出雲流庭園「庭の境界とあわい」

林 秀 樹

1 出雲流庭園と持続可能な開発目標(SDGs)

表題とは少し話はそれるが、出雲流庭園の作庭の背景を考えてみたい。

出雲流庭園の作り続けてきたのは、農業にいそしんできた出雲の人々である。そこには、200年以上変わらぬ屋敷構えが残り、暮らしの中で持続可能な社会を造りあげようとする強い思いを感じるのである。

SDGsとは、2015年の国連サミットで合意され「2030アジェンダ」で掲げられた目標。「誰一人取り残さない持続可能でより良い社会の実現を目指す」ものである。

国連の持続可能な開発目標(SDGs)と出雲流庭園がどう関係するのだろうか疑問と思うかもしれない。実は、この開発目標には、一つ忘れられているものがあると思っている。文化的価値である。

人びとの暮らしで継承されてきた「文化的価値」が軽んじて、持続的発展が可能であろうか。農業や土木をあらわす「Agriculture、Civil Engineering」を見るまでもなく、農事には文化があり、土木技術には市民の暮らしが潜んでいるのである。最先端の技術を駆使するだけでなく、民族の歴史や文化を忘れてはいけない。

これまでも出雲流庭園には、美しく整えられた庭のデザインの中に、「五穀豊穡」「無病息災」などの願いが秘められていると述べてきた。気宇壮大な話のようではあるが、出雲流庭園にSDGsの目標達成のヒントがあるように思えてならない。

2 出雲流庭園のある暮らしと境界

本題に入る。儀式の場である「おもて(客間)」と庭の境界の謎解きである。

出雲の庭を調査し観察を続けていると様々な「境界」と出会う。

境界には、線引きできる厳密な境界線だけではなく、少し幅のある「あわい空間」で仕切られたものもある。出雲流庭園を文化的価値の観点から調査を進めると、この二つの境界がうまく作用し、出雲の人びとの暮らしを支えてきたと思えてきた。

かつて人びとは、家を建てる前に地鎮祭を行い、地荒神に土地の利用の許しを得、屋敷の境界を定めた。屋敷と家屋を守るため、「出雲屋敷」の祈祷を受けている人びとも多く、玄関口(門口)に祈祷札が貼り付けられている。屋敷の片隅に屋敷神である「荒神」を祀る家も多く残っている。このように屋敷や居宅の境界は厳密に線引きされているが、だが、庭での出入口となる犬走りでは、あわい空間で外と仕切られる。



玄関の祈祷札
・鴨居の上、玄関の内と外に貼り、邪鬼を防ぐ
左 出雲大神
出雲屋敷守護
右 出雲大神
地鎮祭守護



庭の片隅の地荒神
・屋敷の出入口から一番遠い南西の角に祀られることが一般的
・毎年秋にお祭りをする
・荒神と陰刻された小さな石塔や自然石の丸石

3 出雲屋敷の様々な境界

人びとは不審者の侵入を恐れ、家の窓や戸を閉める。しかし、周囲を塀などで囲まないと、庭までは容易に入ることができる。

出雲の屋敷は、周りを生垣(築地松)や塀で囲むことが多い。そこに居宅を構え出雲流庭園を設える。そこには、泥棒などの侵入を防ぐのはもちろんだが、病魔や邪鬼が容易に入り込まないよう仕掛けを巡らしている。特に出雲流庭園の果たす役割が大きいと考えている。

「おもて(客間)」から眼前に広がる出雲流庭園は、東、南、西の三方を塀や生け垣で囲まれている閉鎖的な庭である。借景を取り入れている庭も少なく、閉じられた空間といって良い。

庭への唯一の出入口となる「中門」は昼でも閉じられており、開けられることはない。「この門は、婚礼と葬送の時にだけ開ける。家の主である男が公式に中門をくぐるのは、葬送される時だけである。女は婚礼の時に門をくぐり、葬送の時に出るので二度中門をくぐる。」と語る。高齢の人からではあるが、何度も同じ話を聞いている。

庭に入ると「おもて(客間)」に面した「げたつき」から上がる。「げたつき」とは犬走りにある大きな役石である。

この石は一般的には沓脱石というが、出雲では「げたつき」と独特の名で呼ぶ。

盆や法事の時には、僧侶は「げたつき」から上がり仏間に向かう。

今は廃れて少ないが、お日まち神事でも活躍する。「なおらい」に招いた神主などの神職は、庭に入り「げたつき」から「おもて(客間)」にあがるという。

出雲では、ハレとケの表舞台となる「おもて」。そこに主役となる人が出入りするための「げたつき」。ハレとケの行事を陰で支える庭の主要な役石である。



生垣が無く田園風景と借景を望む
出雲市矢尾町 M 邸



葬式のことを出雲では「ソーレン(葬礼)」といい、棺を入れて行く駕籠のことをソーレンカゴといった。……棺はオモテグチから出し、出したあとを一束わらで掃く。
1973年(昭和48)「日本の民俗 島根」
石塚尊俊著、第一法規

婚礼と庭
嫁が庭まで来ると「待謡」を歌い、挨拶を交わし、婚礼が始まる。
1994年(平成6)安来市飯梨郷土誌
持参した荷物もちょうすの上ののせて、おもての方から座敷へ上がる。
1981年(昭和56)下山佐の今昔

4 出雲流庭園と「おもて(客間)」とのあわい境界「げたつき」

出雲流庭園に不可欠な「げたつき」。この石は、軒端(軒先)の内、縁石で仕切られた犬走りの内側に据える。

かつては、軒端は単なる雨よけの空間ではなかった。お盆には軒下に提灯下げ、祖先の霊を迎えた。軒下の桁や棧に提灯をぶら下げるための釘が打ってある家も多い。童謡「たなばたさま」で歌われるように七夕には軒端で短冊をつけけた笹が揺れていた。

出雲流庭園では「げたつき」は、家の領分であり庭でもある、線が曖昧な「あわい空間」に据えられているのである。

このような空間を何と呼べばよいのだろうか。能楽師である安田登が、「あわい」という言葉をあげ「太平記」を語るテレビ番組にヒントを得た。さらには、2022年春に発刊された「間合い 生態学的現象学の探究」の中で著者河野哲也は、日本庭園の「間」と「間合い」について言及していることを知った。

剣道では「一足一刀の間合い」とは竹刀の先がわずかに交差した距離をさす。出雲流庭園と家屋との境にある犬走りは、まさに「一家一庭の間合い」である。

出雲市平田町の庭を訪ねたとき、奥様が「嫁に行った娘が、嫁ぎ先の家には犬走りがないと嘆いている。」と心配そうに話されるのを聞いた。犬走りは出雲地方では必ず設えるものだろうか。雨の多い地方である。家屋を守るためにも、犬走りは必要だと話す人も多い。

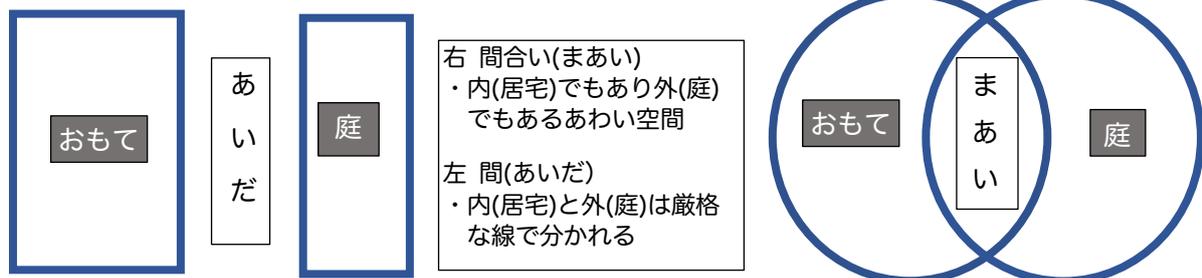
ところが、松江市宍道町の雲本陣を訪ねると、松江藩の本陣であった屋敷には犬走りがないのである。松江市北堀町の武家屋敷などにも犬走りは見あたらない。寺院でも庭先に犬走りを作らないことが多い。

たとえ、出雲地方であっても犬走りを必ず据えるのは、出雲流庭園を持つ屋敷である。



上 出雲流庭園 出雲市斐川町 原鹿豪農屋敷庭園
 ・犬走りの中に据えられた「げたつき」
 ・南側の整形石 ハレとケの出入口、婚礼では花嫁が上がり、葬送の時は棺を出す

下 本陣屋敷庭園 松江市宍道町 八雲本陣庭園
 ・庭の白砂の中に直に据えられた「沓脱石」



5 出雲流庭園の影の主演「げたつき」さまざま

「げたつき」は出雲流庭園には影の主演があると思っている。婚礼や葬送などのハレとケの舞台となる「おもて(客間)」に出入りするための役割を担う大切な役石である。

出雲流庭園は形式美の庭である。庭の様式を枯山水とし、石燈籠の種類と配置、常緑樹に限定した庭木など、様々な庭づくりの約束事がある。

本来、家に入るのは玄関(木戸口)など、出入り口は定められている。定められた出入口からである。先日尋ねた出雲市東福町のお宅では、「娘が嫁に行くとき、玄関から出ようとしたので慌てて止め、「おもて」の「くつぬぎ」で靴を履かせた。ほっとした。」と笑顔で話されたのが印象的だった。

沓脱石とは何か。沓とは今様の靴ではない。沓脱石は、日本庭園の役石として歴史は長く、長靴や革靴の靴とは異なり「沓」と書く。整形式の切石や自然石の濡縁に接しておく。出雲流庭園では、この役石を沓脱石と呼ばず「げたつき」という。

出雲では、「この石は沓脱石ですか？」と尋ねると、いつも答えは「げたつき」である。

下の二枚の写真を比べてみる。とっさには、どこの庭であろうかと迷う。似かよった意匠である。出雲流庭園が形式美の庭であるという真骨頂である。



出雲市浜町 出雲文化伝承館庭園



出雲市島村町 T 邸庭園

沓脱石 二様 (出雲流庭園ではいずれの石も下駄突)

- ・南側の整形石 ハレとケの出入口、婚礼では花嫁が上がり、葬送の時は棺を出す
- ・西側の自然石 ハレとケの場面では使わない
庭の茶室などへの出入口、客人はここから茶室の貴賓口へ向かった



沓脱石 二様 奥出雲町 糸原邸庭園

左 東側「げたつき」
縁石で厳密に仕切られ、出入りを拒む

右 南側「げたつき」
庭の茶室への出入口、縁石を切るように前石を据える
糸原家では、ハレとケの場面での「下駄突き」からの出入りは無く、表玄関を使用



6 謎解き沓脱石

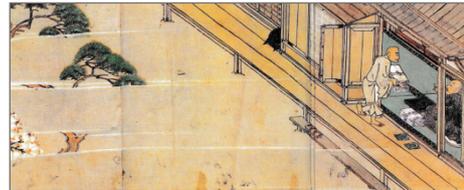
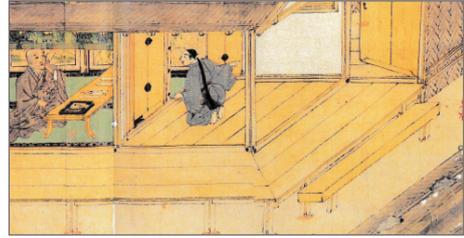
出雲流庭園を観光や視察で訪れる人も増えてきた。庭の解説を依頼された時、ここでは、沓脱石を「げたつき」と呼び、婚礼や葬送の場で大事な役割を果たすと説明する。「立派な玄関があるのに、なぜ庭から入るのか?」「足立美術館や玉造温泉の旅館の庭園では、どちらの名で呼ぶ?」と質問が飛び交う。

庭の沓脱石とは何か、いつ頃からあるのか、古い絵図を探した。

国会図書館デジタルコレクションに南北朝時代の絵巻「慕帰絵詞(ぼきえことば)」がある。親鸞聖人の後継者覚如の伝記である。当時の暮らしがわかる場面も多く、縁側に上がる僧侶の姿や踏み台を見ることができる。

室町時代には、すでに庭から居室に上がっていたのである。木製の踏み台が設えられている。石へのこだわりは無く、重い石を運び込むことなどせず、木製としたのであろう。

まれに出雲流庭園のある居宅でも木製の踏み階段を見ることがある。しかし、これらはあくまでも居宅の一部として作られており、縁側とは別構造となっている。絵図の踏み台は、庭の役石である沓脱石と同じく、庭の一部であろう。何故だろうか。出雲流庭園の謎解きの一つとして、取り組む課題と考えている。



上・中 絵図

・部屋の格式で異なる踏み台の板厚

下 絵図

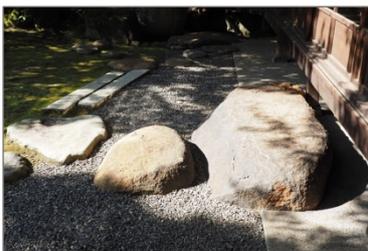
・老僧が入滅、踏み台もない濡れ縁に草履も揃えず駆け上がる若い僧



左 松江市古志町 N 邸
・長い庇の下、雨戸より外側に踏階段



右 出雲市塩冶町 F 邸
・雨戸より外側に踏階段、隣には「げたつき」



沓脱石 二様

右 鳥取県大山町 門脇邸

左 京都市 清風荘庭園

・犬走りはコンクリート張り
⇒泥はねを防ぐため、後に作られたか



7 「げたつき」の謎解き

出雲流庭園では、庭木や添景物を一般的な名称を用いず特異な名を付けることも大きな特徴である。主木となる庭木クロマツを「たかさご」、タラヨウを「たらいのき」と呼び、この庭の要となる巨大な手水鉢を「てんすい」と称する。沓脱石を「げたつき」と呼ぶのもこの庭に秘められた謎が背景にあると考えている。

これまでも出雲流庭園には、美しく整えられた庭のデザインの中に、「五穀豊穡」「無病息災」などの願いと心構えが秘められていると述べてきた。

たとえば、庭の南西角に大きな立石を据えることは、出雲流庭園の特徴の一つである。寺の山門でにらみを利かせる仁王像と同じように、邪鬼の侵入を防ぐ役割を持たせたものと考えている。

「げたつき」とは、下駄を履いた何かが見えない壁に突き当たり、進行を止められたと考えるとおもしろい。同じように、かつては、町や村の道づくりでは、丁字路がほとんどであった。村の入口の丁字路には六地藏などを祀り、邪鬼の侵入を防いでいた。

沓脱石は、名のとおり沓(下駄、草履)を履いたり脱いだりする台となる機能を持つ石である。ここからの出入りは自由と考えてもよい。

「げたつき」には、自由な出入りは認められていない。石であるにもかかわらず「げたつき石」とは呼ばないことから想像できる。

右の写真は、犬走りの境界石を挟んだ外側に下駄を置いてみた。あくまでも推測であるが、「げたつき」は、履いている下駄(沓、草履)が突き当たり、前に進むことができない、大きな石の壁だと考えると合点がいく。ここからの出入りが認められるのは、婚礼や葬送などのハレとケの場面であり、その時に限り「げたつき⇒沓脱石」に姿を変えろということであろう。

最後に、お呪いのような石の名からSDGsについて考えて見たい。邪鬼を防ぐということは、「そなえよ、つねに」であると考えてもよい。長い歴史を育むことができた出雲の屋敷群。ここでは出雲流庭園が、持続的発展が可能な生活を支える羅針盤となっていたのではないかと考えている。



参考にした図書

- 1 間合い 生態学的現象学の探究
河野哲也, 東京大学出版会, 2022年
- 2 太平記「あわい」を生きよ 安田登
NHK100分で名著テキスト, 2022年
- 3 境界の発生 赤坂憲雄, 講談社学術文庫, 2002年
- 4 軒端の民俗学 野本寛一, 白水社, 1989年

